

# 自己表現トレーニング前後におけるスピーチに関する態度の変化

Changes of Speech-Associated Attitude Before and After Speech Training

渡邊 文枝\* 富永 敦子\*\* 向後 千春\*\*  
Fumie WATANABE\* Atsuko TOMINAGA\*\* Chiharu KOGO\*\*

早稲田大学大学院人間科学研究科\* 早稲田大学人間科学学術院\*\*  
Graduate School of Human Sciences, Waseda University\*  
Faculty of Human Sciences, Waseda University\*\*

<あらまし> 本研究では、スピーチ態度尺度を用いて、自己表現トレーニングに対する質問紙調査を行った。因子分析の結果、「言語的能力」「スピーチへの不安」「非言語的能力」「スピーチへの積極性」の4因子17項目が抽出された。スピーチ態度尺度の下位尺度得点を用いて、自己表現トレーニングのプレとポストを比較した結果、スピーチへの不安は有意に低くなり、言語的能力、非言語的能力、スピーチへの積極性は有意に高くなった。これらの結果から、自己表現トレーニングを繰り返すことにより、学習者のスピーチへの態度が向上する可能性が示唆された。

<キーワード> 自己表現, トレーニング, スピーチ, 尺度の開発, 大学授業

## 1. はじめに

「学士力」や「社会人基礎力」の土台はコミュニケーションや問題解決のための言語能力である。とりわけ即時的な言語能力としてスピーチの技能をトレーニングすることが必要である。スピーチのトレーニングは、科目内容にかかわらず、どんな授業でも短い時間を使って実施することができる。本授業実践では、授業の冒頭を使用し、グループワークのアイスブレイクの代わりとして、「自己表現トレーニング」という名前のスピーチの練習を行った。この目的は、相手からの質問に対して的確かつ論理的に回答を考え、それを即時に口頭表現するスキルをトレーニングすることであった。本報告ではこの自己表現トレーニングにおけるスピーチへの態度の変化について検討する。

## 2. 授業

授業は2014年度の春学期に、私立X大学における文理融合の学部の学生を対象に行われた。教室での対面講義で行い、内容はインストラクショナルデザインの応用に関するものであった。自己表現トレーニングは授業の冒頭15分を使用し、半期で7回実施した。毎回5~6人程度のグループを編成し、与えられたテーマについて、グループメンバーそれぞれが1分間でスピーチを行った。テーマは、「自己紹介(第2回)」「最近ちょっと気になること(第3回)」「人間科学って何ですか?(第4回)」「あなたはまわりからどんな人だと思われていますか(第9回)」「会社に入ったらどんな仕事をしたいですか?もし自分の希望と違う仕

事に回されたらどうしますか?(第10回)」「あなたが幸せに生きるために大切だと思うことは何ですか(第11回)」「世界があと1ヶ月で終わりになります。あなたは何をして過ごしますか?(第12回)」であった。グループ活動が終わったあと、教員が自己表現スキルのポイントを解説した。

## 3. 方法

本授業の受講生106人を対象に、質問紙調査を行った。質問紙には作成したスピーチ態度尺度26項目を用いた。回答方法は「あてはまらない」「ややあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「あてはまる」の5件法とした。回答結果は、それぞれ1点から5点に得点化した。調査は、2014年5月(第5回授業時、プレ調査)と7月(第12回授業終了時、ポスト調査)に実施した。

## 4. 結果

### 4.1. スピーチ態度尺度の因子の抽出

受講生106人のうち、プレの回答者は88人(回答率83.02%、男性44人、女性44人;平均年齢19.94歳、 $SD=1.00$ )、ポストの回答者は90人(回答率84.91%、男性45人、女性45人;平均年齢20.13歳、 $SD=0.99$ )であった。自己表現トレーニングを開始して間もないプレの回答データを用いて、スピーチ態度尺度についての探索的因子分析を行った(最尤法、プロマックス回転)。その結果、解釈可能な4因子17項目が得られた。4因子による分散の説明率は60.99%であった(表1)。

表1 スピーチ態度尺度の探索的因子分析結果

	F1	F2	F3	F4	
<b>第1因子 言語的能力 (<math>\alpha=.825</math>)</b>					
17 話がまとまらないことがある*	-.807	.134	.158	.268	
14 話しても大事なところが伝わらない*	-.669	-.007	-.136	.021	
5 話がわかりやすいと言われる	.654	-.210	-.176	.246	
11 ストーリーを考えて話ができる	.650	.227	.217	.093	
8 理路整然とした話ができる	.619	-.035	.110	-.125	
<b>第2因子 スピーチへの不安 (<math>\alpha=.764</math>)</b>					
3 話をするときに緊張してしまう	.192	.866	-.209	.086	
4 話すときに「えー」や「あー」を言ってしまう	-.077	.678	.201	-.084	
20 スピーチを指名されるとドキドキしてしまう	-.030	.617	-.070	.186	
7 人前で話すのがこわい	-.220	.455	-.187	-.278	
24 大勢の前で話すとき声が震えてしまう	-.083	.448	.158	-.085	
<b>第3因子 非言語的能力 (<math>\alpha=.682</math>)</b>					
23 話をするときの身振りがうまい	-.066	.084	.616	-.081	
16 おもしろい話をして笑いを取るのが得意だ	-.046	-.155	.580	.028	
18 話をするときの間合いがうまい	.264	.124	.580	-.025	
9 話によって人の心をつかむことができる	.082	.041	.574	.044	
<b>第4因子 スピーチへの積極性 (<math>\alpha=.617</math>)</b>					
12 話をするなら、よく伝わる話し方をしたい	-.103	.076	-.102	.908	
2 みんなの前で話するのは自分にとっていい機会だと思う	-.018	-.076	-.018	.610	
19 みんなに聞こえるように話すことができる	.024	.004	.329	.459	
*逆転項目	因子間相関	F1	F2	F3	F4
	F1	-	-.540	.499	.165
	F2		-	-.371	.006
	F3			-	.134
	F4				-

表2 因子別 下位尺度得点の平均と標準偏差 ( $n=74$ )

	言語的能力	$t$ 値	スピーチへの不安	$t$ 値	非言語的能力	$t$ 値	スピーチへの積極性	$t$ 値
プレ	2.74 (0.77)	1.69 <sup>†</sup>	3.71 (0.76)	2.44 <sup>*</sup>	2.71 (0.74)	2.57 <sup>*</sup>	4.22 (0.71)	1.78 <sup>†</sup>
ポスト	2.84 (0.69)		3.54 (0.86)		2.86 (0.79)		4.35 (0.49)	

† $p<.10$  \* $p<.05$ 

因子名については、下位項目をもとに検討した結果、第1因子は「言語的能力 ( $\alpha=.825$ )」、第2因子は「スピーチへの不安 ( $\alpha=.764$ )」、第3因子は「非言語的能力 ( $\alpha=.682$ )」、第4因子は「スピーチへの積極性 ( $\alpha=.617$ )」と命名した。尺度全体の $\alpha$ 係数は.833であった。

#### 4.2. 各因子のプレ/ポストの比較

各因子の下位項目の平均点を下位尺度得点とし、因子ごとにプレとポストの下位尺度得点を比較した(表2)。プレとポストの両方に回答した74人(男性38人、女性36人;平均年齢19.89歳,  $SD=0.92$ )を分析対象とした。

対応のある $t$ 検定の結果、スピーチへの不安( $d(73)=2.44$ ,  $p<.05$ )と非言語的能力( $d(73)=2.57$ ,  $p<.05$ )は5%水準で有意であった。言語的能力( $d(73)=1.69$ ,  $p<.10$ )とスピーチへの積極性( $d(73)=1.78$ ,  $p<.10$ )は有意傾向であった。

## 5. 考察

スピーチ態度尺度の下位尺度得点を用いて、自己表現トレーニングのプレとポストを比較した結果、スピーチへの不安は有意に低くなり、言語的能力、非言語的能力、スピーチへの積極性は有意に高くなった。これらの結果から、学習者の多くは、スピーチへの不安が軽減され、スピーチに必要な基礎的な能力を主観的に高めることができたと考えられる。すなわち、自己表現トレーニングを繰り返し行うことにより、学習者のスピーチへの態度が向上する可能性が示唆された。

## 6. まとめ

スピーチ態度尺度を用いて、自己表現トレーニングに対する質問紙調査を行った。分析の結果、自己表現トレーニングを繰り返し行うことにより、学習者のスピーチへの態度が向上する可能性が示唆された。今後は、学習者のスピーチ力に対して、客観的な観点からの学習効果を検証する必要がある。